

## キリスト道講演会

## キリスト降誕の秘義

2015年12月13日(東京 新宿)

神さまの隠された本当の意義 紀元前と紀元後 キリストの突き抜け 神の義と愛 十字架の道 天使たちの喜びの音信 洗礼のヨハネ 聖霊があなたに降る 天の次元 滑稽な無神論 自分は空っぽ あなたはすべて ただ御意が成りますように ザカリヤの預言 私の国はこの世のものではない 我々の内側を照らす光 イエスこそは本当のプレゼント 霊はどこへ行くの? 好むのは光が闇か 人の法と神の法 私の身分証明書・神さまからのラブレター 法律学徒として私の遺言 言い逆いを受くる徴 日本人の信心 形ある物を一切造るな 私があなたを選んで捕まえた 神さまのシナリオとおりに 因果法則を全部断ち切って 裁きは私に、愛はひとに 小さなキリストにされる 祈り

## 神さまの隠された本当の意義

今日の講演のタイトルは「キリスト降誕の秘義」という題です。この「秘義」というのは、字引に出てくる「秘儀」ではなくて、隠された本当の意義、つまり奥義ということ。神さまの隠された本当の意義は何かということ、**「キリスト降誕の秘義」**というタイトルを掲げました。

といいますのは、日本人というのは不思議な民族なんです。クリスマスだといって皆さん楽しんで過ごしておられるでしょ。日頃はキリストのことなんか全然思っていない人が、クリスマスになると何かはしゃいで、「楽しい、楽しい、クリスマス」という。何がそんなに楽しいのかなと、ずっと考えていたら、わかったんです。サンタクロースなんですよ。

サンタクロースがいろんな物を持ってきてプレゼントしてくれる。それでうれしい。キリストなんかどっかへ行っちゃってしまっている。だから結局、サンタクロースというのは商売というか、プレゼントなんですね。サンタクロースは物質的なプレゼントをいろいろくれる。でも、神さまがくださるのはそんな物質的なものではなくて、本当の永遠の生命です。それをしっかりとつかまえないといけないのに、なにかサンタクロースでもう、日本の方々もサンタクロースの嗜好かっこうをして、あっちこっちにうるちよろ、うるちよろ、百貨店とかそんな所でやってたりする。それから、クリスマスツリーです。イルミネーションがきれいですよ。ああいう、なにか外見的な華やかさということに關しては、非常に日本民族は敏感なんです、芸術の民ですから。

非常に美しいけれども、肝心のキリストさまはどこに行ったのか。キリストは何のために地上においでくださったのか。皆さんにとつて、なぜキリストの生誕が喜びなのかと。そのことをしっかりと考えていただいて、単なるお祭騒ぎで終わってほしくないというのが、私のこの「キリスト降誕の秘義」という今日のタイトルなんです。

## 紀元前と紀元後

講演会の案内にこんなことを書きました。

『日本人にとつてクリスマスは『楽しいお祭りの日』として、華やいだ雰囲気<sup>かき</sup>が醸し出されています。人類の歴史においてキリストの降誕は、それを境に紀元前と紀元後が分けられるほどの大きな出来事でした。』

私はまだ調べなければいけない。紀元前と紀元後を分けたのは、誰がどんなふうにして、どういう手続で分けたのか。それは前にちよつと調べたことがあったんですけども、その書類がどこかへ行ってしまった、見つからない。BC、ビフォー・クライスト (Before Christ)、つまりキリスト誕生以前の時代というものと、それからキリスト誕生以後の世界、現代ですね。まあ大体、二千年前のところを境にして分かれた。それはなぜなんだろうか。それを皆さん、考えられたことがありますか。紀元前、キリスト前はどうだった。それに対して、キリスト後はこうなんだという、そのコントラストです。これがとても大事ななんです。

それは聖書によりますと、ヨハネ伝に書いてある。1章17節、文語訳で読みますと、

「律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。」

と。「律法はモーセによつて」という。モーセというのが律法の代表者です。モーセによつて与えられた律法。それから、キリストは何をもたらしただのかというところ、「恩恵と真理」をキリストは持つて

きてくれた。もう律法から解放された。律法というのは法律なんです、神さまの法律です。神の法です。我々は、法学部出身者はみな人の法を勉強してきたけれども、人の法だけで留まっていたらだめなんで、本当は

「人の法はこうだけれども、神の法はこうだ」

と。キリストは言われた。

「あなた方は、『敵を憎め、友だちは大事にしろ』と聞かされてきているけれども、私は言う、『敵のために祈れ』と。」

「敵をやつつけろ」というのが昔のキリスト以前の法律だった。

「味方はしつかり大事にしろ、しかし、敵は徹底的にやつつけろ」ところが、キリストは、

「そうじゃない。敵のために祈れ。お天道さんを見てごらん。太陽は善い人にも悪い人にも、どんな人にも等しく陽を昇らせてくださっているではないか。そして、どんな人にも雨を降らしてくださいっているではないか。あなた方は、本当に神の子、父なる神さまの子どもであろうとするならば、そのくらいのところにはいかなないとだめだよ」

と。友人は大事にする、しかし、そうでない奴は徹底的にやつつける、そういうことではだめだということキリストは言われた。「敵は徹底的にやつつけろ」というのが昔の律法だった。それはモーセを通してやってきた。このモーセを通してやってきた律法というのは、我々とは、ある意味で

は感覚が合うんですよ。「敵は徹底的にやっつける。仲間は大事にしろ」と、これは大体、我々と似ているわけです。

### キリストの突き抜け

ところが、キリストはそれを突き抜けた。突き抜けて、

「天の父は、あたかもお天道さんみたいに、いい奴にも悪い奴にも等しく陽を昇らせ雨を降らせたもう。そういった無差別に、理由なく——あいつはいい奴だからこうしてやろう、あいつは怪しからん奴だからこうしようという——そういう一々理由をつけて何かするのではなくて、無条件に人を生かす。それが神さまの法だよ」

と。だから、大体、モーセの律法は、我々法律学者がやっている「人の法律」と似ているところがある。モーセの十誡なんていうのは刑法の中にどんどん取り入れられてますしね。ところが、キリストはそれを突き抜けてしまった、

「本当の神さまの心というのは、そんな理由付けなんかはない。愛そのものである」と。それをキリストはもたらした。

そのキリストはどういう生き方をなさったかといったら、福音書を見たら、いいことばかりなさっている。ところが、いいことばかりなされたキリストが十字架につけられて殺されてしまった。「これは何だかね!」ということですね。何で、あんないい人が、あんないいことばかりなされた方

が十字架につけられ殺されて、地獄に突き落とされたのか。神さまさえもキリストを見捨てた。

「わが神、わが神、なんぞ我を見捨てたまいし」

というキリストの叫びです。本当に神さまは捨てたんですよ。それは何なんだと。

本当は私たちがキリスト抜きで直接神さまの前に立ったらそれなんです。神さまの義というのは正しいですから。ルターにとっては裁きの義だった。人は神の前に立てない。罪びとは神の前に立てない。人の目はごまかせても、神さまの目はごまかせないと。

法律というのは、人を外側だけで裁くんです。つまり、心の中にまで入りこまない。神さまは何でも見通しておられるから、人の法律で逃れまくっても、神さまの目からみたら、覆いは外されて、底の底まで見透かされて、「どうだ!」と言われたら、誰も神さまの前に、

「私は正しい人間です。私は立派だから、神さま、あなたは受け入れてくださいますね」

なんて、そんなことは誰一人言えない。ところが、言ってたやつが居るんです。それが福音書に出てくる律法学者だとか、そういう律法の専門家です。それは誤魔化しの道を知っている。外側だけで繕っている。内側は全然逆なんです。皆から尊敬される。それをキリストは徹底的にやっつけた。

「偽善なるかな、学者、パリサイ人よ」

と。学者というのは律法学者です。

## 神の義と愛

そんな外側ではない。そうではなく、もつと内側だと。内側を神さまに見透かされたら、誰も立てない。それで苦しんだのがルターだったんです。ルターは模範的な修道僧です。その模範的な修道僧のルターが神さまの義の前に、義の神さまに——「義」を一応、「正しさ」と言っておきましよう——そういう正しいことを貫きたもう、その

「神さまの前に自分なんか到底立てない」

と言って、彼は青ざめてぶっ倒れた。放っておけばそのまま死んでしまうところを助けられた。そのルターがどうして救われたかというところ、

「神の義は福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ」

と、ローマ書にある。その言葉でルターは目覚めた。「神の義」というのは、徹底的に裁いて、人間を地獄に突き落とす、そういう裁きの義だと思っていたところが、実は裁きの義の奥に愛が隠れていた。その隠れている愛に気がつかなかった。それにルターは目覚めた。

「神の義は福音のうちに顕れた」

と。福音とは何か。キリストに関わる音信おしづれです。全キリスト、キリストの全てが福音なんですよ。人間がダイレクトに神さまの前に立てば、もう百万ボルトの電流に触れてぶっ倒されるようなものだ。それをキリストは、自分は全く義人なんです。「義人」とは何かというと、神さまの御意みこころを「はい。はい」と言って全然逆らわない。それが「義」なんです。神の御意みこころをおのが意いとして受けと

てそのままに生きている。これがキリストの姿なんです。このキリストは何で義人かと言いますと、  
「あなたの御意だけです」  
と言っていた。

「あなたの御意が天において行われるように地にも行わせてください」  
というのが「主の祈り」でしょ。

「あなたの御意が天界において成っているように、この地の世界においても、どうぞあなたの御意が行われますように」

と。それが主の祈りの真ん中にきているんです。みな祈ってますよ、主の祈りを、どの教会に行きましても。だが、本気で祈っているか。本気で自分を献げきって祈っているかと。キリストはそれをやっておられた。

「あなたの御意をどうぞ私を通して成らしてください」

というキリストの祈りに対して臨んできた神さまの御意は、

「お前は十字架にかかれ」

ということですよ。無茶苦茶ですよ、これは。そうでしょ。あのゲッセマネの祈りです。

「他に道はないんですか。あなたは全知全能の神さま。私は精いっぱいあなたの御意をこの地上で伝えてきました。あなたが、『あの病気の人を治してほしい』と仰れば、治しました。全部、私は自分でやってません。あなたの御意が私を通して現れていただけです。」

それで今日までできました。それなのに、なぜ、私は十字架なんですか。なぜ、私がおなたに叩きつぶされて地獄に落とされなければいけないんですか」

と言って悩まれたのが、ゲッセマネの祈りというもの。全く理由がないんです、キリストにとっては。

### 十字架の道

キリストみたいに神の御意だけを貫かれた方は、もし、地上の命に限界があるとしたら、そのままスーッと光り輝いて天に昇っていく。それがキリストの本来の姿なんです。そのまま変貌して天に昇っていく。

それは山上の変貌で顕れています。ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人だけ連れて山の上に登られた。眩い姿に変わられて、モーセとエリヤが現れてきた。どのようにしてイエスが死ぬか——つまり、十字架ですね——その相談事をしていたと書いてあるでしょ。そこできつと、イエスはやはり自分は十字架を背負わねばならないということをハッキリ自覚されたんだろうと思います。とにかく、あの方は祈っていれば、眩い姿に変わってそのままスーッと向こうに行ってしまう方ですから。

我々はニュートンの引力の法則で地へと引きずり下ろされる。地獄は当たり前なんです。親鸞も言っています、「地獄必定の身なれば」と。

「法然上人が言ってくださっている、弥陀の本願にすぎるといことが頼りであって、そうでなかったら、自分にとっては地獄必定の身だ。それを弥陀の本願によって救われるな

んて、こんな有り難いことはないではないか。だから、『南無阿彌陀仏と称えるだけでいい』と仰ったら、それに従う」

と親鸞は言ったわけです。

キリストはもう、祈っておられたら眩い姿に変わってスーッと天に昇っていく。そういうのがキリストの姿なんですけれども、そのお方が地獄にまで突き落とされなければいけません。こんな残酷な運命にキリストは苦しまれた、ゲッセマネの祈りで。

「他に道はないんですか」

と、三度祈られた。でもやはりなかった。

「わかりました。お受けします」

と、決然として立ち上がって、十字架の道を歩まれた。ゴルゴタの丘へ重い十字架を背負って。それが福音書の終わりの方に出てきますけれども。そういう星の下にキリストが生まれたのがクリスマスなんです。だから、お祭騒ぎではないんです、本当は。しかも、

「律法はモーセによって与えられた。恩恵と真理はキリストによってやって来た」

という。「律法に代えて、キリストによって恩恵と真理がやって来た」というが、では、律法はどうなったのか。律法によれば、神の律法が貫けば、我々は裁かれて地獄行き。それを引っくり返して、恩恵と真理——言い換えたら、生命、本当の生命、永遠の生命、死んでも死なない本当の天的な生命——それはイエス・キリストを通してやってきた、プレゼントだよ。そのプレゼントをください

ったキリストなんですから、その代わり、それに対する代償を払ってくださいました。それが十字架だったわけです。

### 天使たちの喜びの音信

だから、ただサンタクロースが来てプレゼントをしているという、そんな気楽な話ではなかったんですよ。そのことをルカ福音書のシメオン老人が言っている。新共同訳で第2章1節から見てください。

「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令ちしきりが出た。

<sup>2</sup>これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。<sup>3</sup>人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。<sup>4</sup>ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上のぼり行行った。<sup>5</sup>身みももっていた、いいなずけのマリヤと一緒に登録するためである。<sup>6</sup>ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリヤは月が満ちて、<sup>7</sup>初めての子を産み、布にくるんで飼う葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

どうですか、救い主の生まれ方が馬小屋なんですよ。そんな厳しいことがあるでしょうか。せめて赤ちゃんぐらいいい場所でもいいお産をしてというのが親の願いだと思っても、みな寒がっ

ていた。だから、しょうがない。馬小屋に宿をとって、飼う葉桶に寝かした。飼う葉桶ですよ。飼う葉というのは馬の餌でしょ。餌を入れておくという所に寝かされたという、救い主イエスの誕生からしてどん底ですよ。

<sup>8</sup>その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。

と。今、アルバイト学生の健康問題が社会的問題になっている。この羊飼いたちはみなアルバイト学生ですよ。他の人がみな布団で安らかに眠っているときに羊の番をしているという、そういうアルバイト学生的な羊飼いたちに神さまのお告げがきた。これも素晴らしいですね。金持ちだとかそういうの特権階級に示されたのではなくて、最も貧しい、夜も寝ないで羊の番をするような少年たちに天使たちの喜びの音信おとずれが知らされたというんです。

<sup>9</sup>すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。

突然ね。だいたい夜だし、星の光は輝いてるかもしれないけれども、真っ暗闇でしょ。狼が出てきたら戦わねばならん。羊を守っているんだから。そういう物騒なアルバイト仕事をやっている時に、ウワッと光が現れて照らしたんですよ。それはびっくりしますよね。何だろう、これはと。「主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた」と、恐がったという。ところが、

<sup>10</sup>天使は言った。『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。

<sup>11</sup>今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。<sup>12</sup>あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を

見つけるであろう。  
 ちゃんと天使は知っているんですね、飼い葉桶の中でイエスがお生まれになったということを知っていて、それを告げた。

これがあなたがたへのしるしである。』

普通の人間が見たら、飼い葉桶に寝ている赤ちゃん——こんなのは貧乏人の子どもで大したことないな、どうでもいいや、と言って見捨ててしまうような赤ちゃん——これが凄いな、神さまから賜った凄い幸せなしるしだよ。そういう喜びの音信がやってきた。それだけではない。

<sup>13</sup>すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

大合唱が起こったというんですね。

<sup>14</sup>『いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ。』

<sup>15</sup>天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、『さあ、ベツレヘムへ行こう。

主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか』と話し合った。<sup>16</sup>そして急いで行って、

これはちょっと羊を放っておいて、羊飼いの主人の命令よりも天使のお告げの方が上だ。これはもう行かざるを得ない。誰にも聞けない音信、みんな寝静まって誰も聞いてない。自分たちだけに与えられたこの喜びの音信。これを見に行かないでいられるものか、ということで、喜び勇んで出かけて行った。急いで行って、

マリアとヨセフ、また飼い葉桶かきに寝かせてある乳飲み子を探し当てた。<sup>17</sup>その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子おきなごについて天使が話してくれたことを人々に知らせた。

<sup>18</sup>聞いた者は皆、羊飼いたちの話不思議に思った。

それはそうでしょう。そんなアルバイト学生の羊飼いがそんなことを言うとは。羊飼いしか知らないでしょ。そんな天使のお告げなんて、証拠も何もないし。しかしながら、不思議に思ったと。

<sup>19</sup>しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。〔ルカ2

・1〜19〕

と。それは、マリアさんがこういうふうさかのぼにそのことを静かに思い巡らしたというのは、前の物語がありますから、その前の方へちょっと遡りましょう。マリアさんがどのようにしてお告げを受けたかということ。

## 洗礼のヨハネ

洗礼のヨハネというのが福音書で活躍します。バプテスマのヨハネは、このイエスよりも六か月先に生まれて、しかも親戚関係なんです。そのことがルカの福音書1章からずっと順を追って書いてあります。5節から、

『ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリヤという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。二人とも神の前に正しい人で、

主の掟おきてと定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。<sup>7</sup>しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。<sup>8</sup>さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。<sup>9</sup>香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。<sup>10</sup>すると、主の天使が現れ、ここでまず天使が現れるんですね。

香壇の右に立った。<sup>11</sup>ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。

天使が現れたら、みな喜ばないんですよ、みな恐がる。やはり人間はどこかやましいところがあるのかしらん。天使なんて聖なるものが現れると、人間は恐くなるわけです。

<sup>12</sup>天使は言った。『恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。これが洗礼のヨハネです。』

<sup>14</sup>その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。

<sup>15</sup>彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいますから聖霊に満たされていて、<sup>16</sup>イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。

つまりキリストの前の露払いの役目、道を備えるという役目をヨハネは授かった。六か月遅れてイ

エスがお生まれになるということになる。

<sup>17</sup>彼はエリヤの霊と力カワラで主に先立って行き、

「エリヤとモーセ」というのは旧約聖書の中の両横綱と言っていいような人です。モーセは預言者として律法を授かった。エリヤはすごい、神の人と言っていいくらいいろいろな奇跡をやっています。最後は火の車に乗って天に昇って行った。エリヤは死んでない。そのエリヤの霊と力をもらって、

父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。』

つまり、キリストがお生まれになるが、キリストによるイスラエルの民の救いの前には準備がいる。その準備の仕事を引き受けていったのがヨハネであるというわけです。

<sup>18</sup>そこで、ザカリアは天使に言った。『何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。』<sup>19</sup>天使は答えた。『わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。』

ところが、ザカリアは喜んでいいないし、すんなりと「はい、そうですか。それはもう有り難いこととでございます」なんて言ってもらえるかと思ったら、そうではなくて、「私は年とってます。奥さんも老齢で、そんな子どもができるような立場にございませぬ」と言っちゃちょっと楯突いたからガブリエルは怒ったんですね。「そうか、お前は口をとじろ」と言って、ザカリアはものが言えなく



なつたんです。ところが、後で同じ天使ガブリエルがマリアのところに行くんですが、こっちは優しいんですよ、全然違うんです(笑)。

<sup>20</sup>あなたは口が利けなくなり、

「喜ばしい報せを知らせるために喜び勇んでお前のところに来たのに、お前は何をゴチャゴチャ文句言うか、あかん。もうお前は黙っておれ」と言っ

この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。』

こうやって、ガブリエルは怒った。

<sup>21</sup>民衆はザカリアを待っていた。

ザカリヤは祭司のお務めに行って中へ入ったきり出てこない。いったいどうしたんだらうと。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。<sup>22</sup>ザカリアはやつと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。<sup>23</sup>やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。<sup>24</sup>その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。<sup>25</sup>『主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました。』(ルカ1:5-25)

と。昔は、結婚している女性は子どもができないと、いちばん恥なんですね。「子無きは去る」というが、これはイスラエルにおいてもそういうことだった。だから、ザカリヤの奥さんのエリザベツは非常に肩身がせまかった。ところが、子どもさんが生まれる。だから、「ああ、やっとこれで人の中に入っていける。自分は今や排除されていない」という喜びを持ったんです。

**聖霊があなたに降る**

<sup>26</sup>六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。

<sup>27</sup>ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。<sup>28</sup>天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとつ、恵まれた方。主があなたと共におられる。」<sup>29</sup>マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。<sup>30</sup>すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。<sup>31</sup>あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。<sup>32</sup>その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座を下さる。<sup>33</sup>彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」<sup>34</sup>マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」

つまり、男の方とは性的な関係を一切持っていないんですから、それに「子どもが生まれるよ」なんて言われたから、マリアは驚いて、「どうして、そのようなことがありえましょうか」と。その時、

天使はここでは親切なんですよね、「なんで私の言うことを信じられんのか!」と言わない。

<sup>35</sup>天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。<sup>36</sup>あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっっている。<sup>37</sup>神にできないことは何一つない。」<sup>38</sup>マリアは言った。「わたしは主のはしめです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

(ルカ1:26-38)

これは大変なことです。ザカリヤとエリザベツは年を取って不妊の身体といっても、それを神さまがお癒しになって、また胎を開かれて自然的な関係で赤ちゃんができる。これはそれほど不思議ではない。ところが、乙女マリアが男の人と関係ないのに赤ちゃんが生まれるなんて、こんなことは普通あり得ないことですよ。

「どうしてそんなことがあるでしょうか!」

と。そうしたら、ガブリエルは平然と、

「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、

神の子と呼ばれる」

と。私にはこれは長いこと躓きでしたね。なんぼイエスが神の子だといっても、これはちよつと、人の子として人間の子として生まれてくるには、ちよつとこれは半分欠けているのではないかと。

マリアさんはいいですよ。でも、男の方の立場が係わらないのですから。男の人が係わるところに神さまが係わってしまったんですよ。こんなことがあるんだろうかと、長いこと私にとつては謎でしたけれども、今はもう思わなくなりました。やはりこういうことはなるほどなあと。つまり、イエスという方はマリアという素晴らしいお母さんを通して生まれますから、やはり人としての側面をちゃんとそこでいただいているわけです。しかも、マリアさんは非常に素直な方です。純な心のきれいな、そういう面を人として受け継いでおられる。それから今度は、人でない面が、さっきの聖霊という神さまの霊が宿って、人として生まれてくる。だから、キリストという方は天からくだってきた方なんです。

## 天の次元

これはヨハネ伝なんかを見ますと、ハッキリ出てくる。天に居た人間だけが天のことがわかる。ニコデモという大変な学者がいたけれども、ニコデモはキリストに兜をぬいで、

「神さまが一緒でないとおあなたがなさっているこんな不思議なわざはできません」

と言ったら、イエスは平然と、

「人は新たに生まれなければ、神の国、天のことはわからない。自然的な誕生をした者はそこまでだ。肉から生まれる者は肉であり、霊によって生まれる者は霊である」

と。霊によって生まれるのは、天から生み出していただく。天の、神さまの霊の力で生み出しても

らって、そこで変貌する。人でありながら、人でないものが上から加わって初めて天界のことがわかってくる。

だから、どんな偉い学者だって、自分の頭で神さまのことを理解しようとしたって、これはどだい間違っている。神さまの次元のことは神さまだけがお示しになれる。その謙虚さがある。それを学者共がわかっているから、自分の頭で理解できるとうぬぼれていますから。それは聖書学者であろうと、神学者であろうと、どの人であろうと、神さまの次元のことは神さましかわからない。当たり前ではないですか。管轄違いなんです。天のことは天の方だけがわかっている。地のことは地の人たちがしつかりやる。

あの宇宙に行ったのも全部、これは地のことなんですよ。今すぐいでしょ、探査機「あかつき」が火星の近くで軌道に入るのに失敗したのを、五年後に金星周回軌道への投入に成功したとか、梶田さんというノーベル賞の方が素粒子物理学の世界の新しい発見をされたとか、由井さんというのが宇宙ステーションから帰ってきたとか。まあ人間というのは本当に、孫悟空ではあるまいし、宇宙の隅々まで行ってくるような、そんな素晴らしいことをやる。そういう自然科学的な面では凄いことをやるし、それから、極小の世界については、ナノだとかなんだとか凄く微小なるものまで究め尽くして、人間はあぶりだしたわけでしょ、遣伝子なんかもやったし。

だから、およそ地に係わること、自然界に係わること、目に見える世界、宇宙もふくめて、このことは人間は徹底的に追究して、かなりいいところまで行っている。ところが、神さまの次元、天

の次元、これはどんなに逆立ちしたってだめです。天の次元は天の神さまの独占領域です。そこに居たのがキリストだったんです。

### 滑稽な無神論

ヨハネ伝一章の始めに、

「はじめ太初に言あり、言は神と偕ともにあり、言は神なりき」

とある。そこに居た方がくだった。そしてマリヤさんの中に宿った。これがクリスマスなんです。だから、天のことは天に居た方しかわからない。それがニコデモとの対話の中に出てくる。誰も天に昇ったものはいない。天に居たものだけが天のことがわかる。当たり前のことを言っておられるけれど、人々はチンプンカンプン。ニコデモなんかは、

「もう一回、お母さんのお腹の中に入れて仰るんですか」  
 と言っているではないですか。キリストは言われた、

「人新たに生まれずば神の国を見ることあたわず。肉から生まれるものは肉だ」

と。つまり人類、人間として誕生した者はそのレベルでしかない。地に属するものである。天から生み出されたものだけが天のことがわかる。これは、イエスという方がやはり天からくだったってマリヤさんに宿ったでしょ。だから、その方は、一方ではマリヤさんの血をひいて人のことはよくわかる、人の情もよくわかる、悲しみもみなわかる。同時に、人にはわからない神さまの世界のこ

とがわかるんですよ。

これは凄くと思いませんか、皆さん。いやもう驚かなかったら変ですよ、本当に。たいていは「そんなアホなことはあるもんか」と蹴飛ばしているんですよ。蹴飛ばしたら足が痛みますよ(笑)。でも、本当にそうでしょ。合理的に考えて、向こうの世界のことは向こうに居た人だけがわかるはずですよ。アメリカへ行った人が、「アメリカはこんなだった」なんて言っても、鎖国している日本人にとっては、「そんなアメリカなるもの我は知らず」なんて言ってもいいわけです。昔の人は、そんな海の彼方は滝壺で落ちてしまいうぐらいしか思っていなかった。アメリカ国がある、イギリス国がある、なんて信じない。神さまの世界があるなんて、普通は全然信じない。無神論です。

「無神論」なんてアホではないかと思う。無神論というのは、神が無いという議論でしょ。法律学でも、「無い」という証明はできないそうです。「有る」という証明はできるんですよ、いろいろな証拠で。けれども、「無い」ということを証明することはできないそうです。どんなにいつても、「無い」というものは究め尽くすことができないということになっている。

それは別として、無神論なんてね——たとえば、私があああの襖ふすまの向こうに隠れているとします。「奥田？ あんなやつは居らへん。あれは伝説上の人物だ」と。向こうで、私はクスクス笑っているわけです。襖を開けて出てきたら、ここに居たやつはぶつ倒れるでしょうね。「あつ、現れた！」と。言うならば、神さまの世界、天の次元と、私たち地の次元とは完全に断絶されている。天の次元からくだった方だけが天のことを話せる資格があるわけです。見て来たんだから、そこから来たんだ

から。ところが、行ったことのない人間が、

「天とは何だろうか、天はどうだろう、霊界とは何だろう？」

と、いろいろな想像をたくましくしてやってみても、それは単なる推論です。本当かウソかわからない。ましてや無神論なんていうのは勝手に唱えているだけなんですよ。神さまから見たら滑稽ですよ。神さまは、

「われは有りて在るものなり」

と、モーセに現れられた。そのいらっしやる神さまを向こうに置いて、無神論なんて、それは神さまは笑うわな、「あいつバカでないか」と。でも、そういうのがたくさんいるでしょ、日本中に。「私は無神論です」と。だから、これから皆さん、「無神論です」と言われたら、「あつ、バカですね」と思ったらいい(笑)。心の中だけです、口に出したらあかんですよ。それは本当の世界を知らないから。知らないから、「無い」と言っているだけ。そのいらっしやる方からしたら、

「何を言っているのか、この人は。バカじゃなからうか？」

と、向こうはそう思いますね。詩篇の中にも、

「愚かなる者は心のうちに神なしと言えり。神笑いたまえり」

と、そういうのが詩篇の中に出てきますから。人間というのはあまり変わらないんですよ、昔のイスラエルの時代も今も。

## 自分は空っぽ

とにかく、イエスという方は、天にいらつしやつた方が地にくだつてきてくれた。それがマリアさんの中に受肉された。そして、人として、福音書で書かれているような、いいことばかりなされてますよ、キリストのなされたことは本当に。パリサイ人が石撃ちにしようとしたら、キリストは不思議がつて、

「私がやったことのどれがいかなのか。私は自分で何もしてない。天の父なる神さまが、『これ』をせよ、これをしやべれ』と言われたことをやっているにすぎない。私はロボットだよ」と。神さまがキリストという器をとおしていろいろな業をなさっている。「自分は空っぽだよ」と言っている。そうでしょ。だから、キリストは、回りの人がいろいろキリストのことをボロクソに言うのが不思議でしょうがない。

「なんで自分をそんなに迫害するのか」

と。彼らは言いました、

「安息日にはならないことをした」

と。つまり、安息日には病を癒すなんてことをやったらいかんと。だけど、「病を癒す」といいまでも、イエスは「立て」と言われただけで立ってしまったんですよ。

「立てと言っただけなのに何でいかなのか」

「いや、あの人は癒えたではないか。それはつまりあなたは彼を癒したのである」

と。法律学で行為論というのがあるんですけども(笑)。言葉だけで人が立ったら、私が彼を立てたと、こんなふうに行爲としてつかまえるのか、というような話なんですけれども。キリストは、

「自分は何も言っただけ。神さまが私の中でいろんなことをなさるんだから、私は空っぽだよ」

空っぽな人間を通して神さまはいろんなことをなさる」

と。ただ、このお方は神さまばかりを見ておられる。

「あなたの御意だけが私の意志。あなたのご意志が私の意志。あなたのご愛が私の愛」

と。全部、向こうが本体で、こっちは空っぽなんです。だから、神さまもいろんなことができるんです、空っぽだから。ところが、人間はあかんわな、自我というものがあるから。

「都合のいいものは使わしてもらいます、都合のわるいものは断ります」

と取捨選択するんです、人間は。だから、そんなやつは、神さまから見たら、使いものにならない。今のクリスチャンはどうですか。いいことをしてもらっている間は、「神さま、神さま」と言っている。ちよつと試験がやってくると、「もう、あなたなんか知らん」とか言う。人間というのは自分中心なんです。「自分に都合のいいところだけはいいただきます、都合のわるいのは断ります」という、これが人間なんです。

## あなたはすべて

ところが、キリストはそうじゃない。本当に神さまに、

「あなたはすべてです。あなたをおいて他に私は存在しません」という。弟子たちが、お別れに際して、

「父を示してください。そうすれば満足です」

と、お別れに際して、「父を示してください」と言った。その時に、

「三年間一緒にいて、わからないのか。私を見たものは父を見たのである」

とキリストは言われた。キリスト自身は空っぽだと。全部この空っぽなるこのイエスという人格とおして神さまが働いておられるだけです。もはやキリストは無責任なんです。無能力者です。責任能力がないんですよ。だから、責任は全部、神さまにある。神さまが責任をとる。

これを「使用者責任」といいます。今、使用者責任というのがある。つまり、従業員がいろんなことをやってへまをやりますと、従業員は貧乏ですから、損害賠償をとれないでしょ。そしたら、雇い主がみな責任をとらされるといのがちゃんと法律の世界にある。キリストがそれなんです。

「私は従業員です。私は、神さまが『やれ』と言えば、『はい』と言って、やる。『向こうへ行け』と言われれば、『はい』と行く。」

と。イエスは「はい。はい」と。だから、「イエス」(Yes)と言うんです(笑)。「はい。はい」と言って、神さまの思うがままに働く。これは使い勝手がいいんですわ。人間というのは、都合がよかつたらやる、都合がわるかつたらやらん。もう全然ためです。ところが、何でも「はい。はい。はい」と言う。

ひとは、「仲良しクラブ」と言うかもしれない。「お友だち内閣」と言うかもしれない。けれども、神さまの御意に対して、常に「はい、イエッサー！」と。あの「百卒長」の話があるでしょ。イエスに、

「私の僕が中風で苦しんでいます。何とかしてやってください」

と百卒長がお願いにきたら、イエスは気前よく

「行ってあげようよ」

と言った。そしたら、

「来ていただく必要はありません。私には部下がいます。私の命令はローマ皇帝の命令です。私は単なる百人組の隊長にすぎない。でも、私の命令の背後にいるローマ皇帝は絶対的権力です。だから、私が部下に『来い』と言えば、さっと来ます。それは私が偉いからではない。背後にあるローマ皇帝の命令だから来るんです。『行け』と言えば行きます。あなたは神さまの王国の主だ。だから、あなたが言葉をくだされば、直ちにそれは成るはずですよ。ローマ皇帝の命令が直ちに部下に通用するなら、あなたは神の王国のそういう権威を持つていらつしやる。だから、わざわざ来ていただく必要はない。『治れ』と一言仰れば治ります」

と言って、イエスの

「行ってあげよう」

という親切を百卒長は断った。そうしたら、イエスは感心されたでしょ。

「未だかつてイスラエルにこんな信仰、これほどに私を信ずる人間はおらん。やがて、天で饗宴きやうえんが開かれるとき、来るべき神の国が成るときに、いろんなイスラエルの人がやって来るけれども、みんな退けられる。こういう百卒長みたいなが一番の宴席につくんだよ」

と言って、キリストがすごく感心された場面がのってます。あれは気持ちいいですね。まあそういうふうなことで、神の言葉というのは凄いいんです。

ただ御意が成りますように

「<sup>35</sup>天使は答えた。『聖霊きよたまがあなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。<sup>36</sup>あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。<sup>37</sup>神にできないことは何一つない。』<sup>38</sup>マリアは言った。『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。』(ルカ1:35-38)

これはまたマリアさんはすごいわ。およそ常識では考えられないことですよ。男の人を知らない人間が身ごもるなんてことは、これはとうてい普通には考えられません。けれども、他ならぬガブリエルという天のお使いが告げてくれた。「かくかくしかじかだ」とわざわざ丁寧に理由まで言ってくれた。ことの次第はこうだと。それを聞いたら、

「はい、どうぞ。御意みこころのとおりに成りますように。私は主のはしためです。ただ御意が成りますように」

と言って、自分を投げ出したんです。これがマリアさんの素晴らしいところです。

「<sup>38</sup>マリアは言った。『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。』そこで、天使は去って行った。

「天使は満足して去って行った」と私は書いた。いや、ガブリエルはうれしかったでしょうね。マリアさんがすつと受け入れてくれたというので、もう喜び勇んで天使は去って行った。でも、マリアさんは心配ですよ。だんだんお腹が大きくなってくる。それは人から見たら不思議ですよ。なにも結婚してないのにお腹がだんだん大きくなってくる。それはもう辛いですよ。そこで、エリザベツを訪ねて山里へ行くわけです。

<sup>39</sup>そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。<sup>40</sup>そして、ガカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。<sup>41</sup>マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。

エリザベツのお腹の赤ちゃんはもう六か月近くになろうとしているので動くわけですよ。マリアさんが「こんにちは」と挨拶したら、もうそれで胎内の子がおどった。だからここですごい讚美が流れるわけです。

エリサベトは聖霊に満たされて、<sup>42</sup>声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された

方です。胎内のお子さまも祝福されています。<sup>43</sup>わたしの主のお母さまが「主」というのはイエスのことです。

わたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。<sup>44</sup>あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。<sup>45</sup>主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですよ。」

<sup>46</sup>そこで、マリアは言った。

これは「マリアの讃歌」という非常に有名なところですよ。

「わたしの魂は主をあがめ、

<sup>47</sup>わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

<sup>48</sup>身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。

今から後、いつの世の人もおわたしを幸いな者と言いつでしよう、

<sup>49</sup>力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、

<sup>50</sup>その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。

ここで、「主を畏れる者」というこの「おそれる」というところは「恐れる」という字は書いてませんね。畏れかしこむという、畏敬の念という、この「畏」という字を当ててます。

<sup>51</sup>主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、

<sup>52</sup>権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、

全部、価値観の転換です。<sup>53</sup>飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。

<sup>54</sup>その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、

<sup>55</sup>わたしたちの先祖におっしゃったとおり、

アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」「(ルカ1・38～55)

これが有名な「マリアの讃歌」ですよ。

### ザカリアの預言

<sup>56</sup>マリアは、三か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。

<sup>57</sup>さて、月が満ちて、エリサベトは男の子を産んだ。<sup>58</sup>近所の人々や親類は、主がエリサベトを大いに慈しまれたと聞いて喜び合った。<sup>59</sup>八日目、その子に割礼を施すために来た人々は、父の名を取ってザカリアと名付けようとした。

みな大体、父親の名前をとるわけですね。

<sup>60</sup>ところが、母は、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。<sup>61</sup>しかし人々は、「あなたの親類には、そういう名の付いた人はだれもない」と言い、<sup>62</sup>父親に、「この子に何と名を付けたいか」と手振り尋ねた。<sup>63</sup>父親は字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。<sup>64</sup>すると、たちまちザ



カリアは口が開き、舌がほどけ、「しばらく黙っておれ」と言われて、ものが言えなかったのが、ここで「その名はヨハネ」と書き板に書いたとたんに、今までの不自由な口が解かれた。

神を賛美し始めた。<sup>65</sup>近所の人々は皆恐れを感じた。そして、このことすべてが、ユダヤの山里中で話題になった。<sup>66</sup>聞いた人々は皆これを心に留め、「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」と言った。この子には主の力が及んでいたのである。

<sup>67</sup>父カリアは聖霊に満たされ、こう預言した。

<sup>68</sup>「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、

<sup>69</sup>我らのために救いの角を、僕、ダビデの家から起こされた。

<sup>70</sup>昔から聖なる預言者たちの口を通して語られたとおり。

<sup>71</sup>それは、我らの敵、すべて我らを憎む者の手からの救い。

<sup>72</sup>主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる。

<sup>73</sup>これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。こうして我らは、

<sup>74</sup>敵の手から救われ、恐れなく主に仕える、

<sup>75</sup>生涯、主の御前に清く正しく。

<sup>76</sup>幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。

イエスのことですね。

主に先立って行き、その道を整え、

<sup>77</sup>主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである。

<sup>78</sup>これは我らの神の憐れみの心による。

この憐れみによって、高い所からあげぼのの光が我らを訪れ、

<sup>79</sup>暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、

我らの歩みを平和の道に導く。」(ルカ1:56-79)

このザカリヤの預言もなかなか非常に深い内容なんです。昔の時代を考えますと、異民族に囲まれている、イスラエルというちっぽけな民です。いろいろな、ペリシテとか何だとか、とにかく戦国時代みたいなものですから、ちよつと弱みがあれば、そこに攻め込んで占領するということ、絶えず恐怖というものに脅かされながら存続していた小国であったと思う。ダビデのときは栄えたけれども、そのあと没落しまして、実に惨憺する姿で、みな救い主を待っていたと言います。その救い主は、「ダビデのあの王国の再来を」というのが彼らにとっての救い主なんです。「永遠の生命」なんてことは全然考えていない、そんな大それたことは。とにかく、「ダビデ王国の再来を」ということです。だから、「ダビデの子よ、ダビデの子よ」なんて、みんな呼ぶでしょ。そういう政治的な王を求めていた。

私の国はこの世のものではない

ところが、イエスがおおいでになったとき、

「私の国はこの世のものではない」と言われた。つまり、

「この世の政治的な権力争い、それは私の関心の外にある。神さまの王国を人々の心の中にうちたてる。人々の心の中が本当の神の心にならなければ争いは絶えない。武力でいくら平和を保つても、それは一時的なものにすぎない」

と。それが多分、イエスの御意だっただけだと思います。だから、イエスは、

「旧約ではこう言われている、敵を徹底的にやっつけろと。私は違う。敵のために祈れ」

と。それこそ律法は我々人間の心にある程度びったりくる。因果応報ですしね。とにかく、やらねたらやり返す。そういう人間世界に通用する律法だったのが、キリストはそれを突き抜けてしまつて、無差別に人を包み込んでしまう。これが人々の怒りにふれたわけです。「そんなものは俺たちは聞いたことがない」と言つて、イエスをやはり十字架につけて殺してしまつたわけですよ。そういうのが後から出てきますけれども。とにかく、このザカリヤの祈り、これは当時の人にとってはその心を表していたと思う。

「ちつぽけなこのイスラエル、存立が危ぶまれるイスラエル、それに対して神が恵みをくださつた。さあ、ヨハネよ、お前はあとからおいでになる救い主イエスの先駆けとして道

を備えて、しつかりやれよ」

という応援歌ですね。

我々の内側を照らす光

1章の79節に目をとめていただきたい。

「暗闇と死の陰に座している者たちを照らし」

という。これは我々がそうではありませんか。もしイエスというお方がこの世においでくださらなかつたら、いったい我々にとって「光」とは何なんでしょうか。まあ、太陽は輝いていますよ。自然界の太陽は輝いています。でも、内なる光、それは我々の中にあるのでしょうか。我々自身の中に、光、生命、それが豊かに宿っていれば、それはいい。

我々は古来から、日本は非常に宗教的な国です。聖徳太子もおいでになった。仏教も流れてきた。それから、鎌倉仏教が非常に盛んになりました。それはひとつは戦火が絶えませんでしたから、非常に無常感に支配されて、お坊さんたちも、

「もうこの世のことはどんなにしたつてだめだ」

といつて、来世というところに望みをつなぐし。良寛さんなんか、子どもさんたちが身売りされていくのが辛くてしょうがない。だから、

「霞立つ永き春日を子供らと 手鞠つきつつこの日暮らしつ」

という、子どもさんたちと遊ぶしか道がなかったという、そういう時代ですよ。

ですから、本当の我々の内側を照らし、死んでも死なない永遠の生命というのは——それはエゴイスト的な生命ではない。求めて求めて争うようなものではない——与えて与えてやまない生命。これは愛です。これはイエスだけがもたらしてくださった。

ちょうど太陽の光がそうです。私は太陽が大好きなんです。日本人も結構、太陽が好きですよ。山に行かれたら、夜中から登って行って、朝日が昇ってくると、ご来光といって喜ぶでしょ。あれは尊いと思う。お日様がなかったら地球は存在しない。お日様がいらっしやらなかったらこれもう闇そのものです。

闇とは何かというと、光がない姿が闇なんです。闇というものは積極的には存在しないと思う。光があるときは闇がない。光がなくなったら闇になる。そうではありませんか。

我々の光、これは神さまです。そういつた神さまの光が我々の中に射し込んでこなければ実は、我々は闇の闇そのものなんです。ホタルだけが例外なんですよ(笑)。ホタルは自分で光を作り出す。我々は光を作りだせない。我々は光を受けて反射することはできますよ。それは反射であって、自分が光そのものには絶対なれないでしょ。自分の中に光はない。生命もないんです。生命も光も愛も全部、上から流れてくる。それを持って来てくれたのがイエスなんです。このことを日本の方々に知ってほしいんです。

## イエスこそは本当のプレゼント

サンタクロースではありません。サンタクロースに誤魔化されてはいかん。あれはプレゼントでご機嫌をとっているだけなんで、イエスこそは我々に本当のプレゼントをくれた。ご自分をプレゼントしてくれた。ご自分の生命をくださった。しかも十字架という犠牲を払って。

犠牲なくしてプレゼントを与えられた。これはいいですよ。でも、ことごとく、なにかこの世の法則というのは何かにつけて犠牲というのがありますね。子どもさんがオギャアと生まれてくるのも、お母さんがどんなに苦しい思いをして生まれてくるか。それも犠牲ですし、ときにはお母さんは生命を落として子どもさんが生まれるとか。いろいろなことで、やはりこの世というものの存在そのものがいろいろなものの犠牲の上に成り立っている。

我々は動植物をいただいていますね。まあ植物は、葉っぱをちぎってもまた生えてくるからいい。でも、動物はその命を奪っているんですよ。命を奪って我々はタンパク質を取っているんですね、動物性タンパク質を。人間は他の動物たちの命をもらって、そして生きています。だから、やっぱり動物たちにも感謝しないとけない。「ごめんね」と言いながら食べないといけない。菜食の方は動物を食べませんよね。植物は葉っぱをちぎってもまた生えてくるから、そんなに罪悪感はないわけです。放っておいたら枯れてしまうから、かえって摘んであげる方がいくらいでしょ、間引いたりなにかして。でも、動物はやはり殺すんですからね。動物の命の上に我々の命が成り立っている。これは神さまがそうなされたから、仕方がないけれども。動物ですら、そうやって自分の犠牲

において私たちを養っていてくれる。これは肉体の命です。肉体の命はそういった動植物によって、それから太陽の光、水、そんなもので我々は保たれていますけれども。内なる霊は、皆さんの本質は霊なんですよ。

人間のからだというのは、脳が支配していますね、この身体は。私は、心というのは身体の一部だと思ふ。脳の働きだと言いますね。心はどこにあるか。心臓かというのと、そうでもなさそうすし。でも、何か身体の一部なんです。身体の一部に心というのがある。

しかし、霊、これは身体とは無関係に存在する。だから、身体は滅びても霊は生きています。私は死んで焼かれて灰になっても、私の霊は焼かれない。霊は生きています。皆さんもそうです。「ひと」というのは、昔の人は「霊が止まる」と書いた。これは『大言海』という大きな辞典に出ています。神霊、神の霊の止まる存在、これが本当の「霊止」だということです。神の霊が止まっている、これが霊止だ。ところが、今は神霊がみな抜けてしまっている。何も止まっていけない。でも、本来は「ひと」というのはこう書いた。だから、霊が止まっていなければ霊止でない。

霊はどこへ行くの？

私はさっき言いましたように、心というのは脳の働きの一部だと思いますから、いわゆる身体という肉体の一部として心はあるでしょうけれども、この霊というのは身体、肉体というものと別に存在する。だから、私は焼かれて灰になっても霊は生きています。ではどこへいくの？

皆さん、この世を去られるときに、どこへ行くの？ お年の方はみな「終活」といって、将来どこへ行くのかという、行き先についてその予約をしておかないといかんわけです。もう私は、ちゃんと予約できているところか、神さまの方から

「あなたはここへ来るんだよ」

と、神さまの方から睡をつけてくださっている。

「あなたの行く所はもう決まっているんだから、地上に居るときにしっかりと働け」

「はい、わかりました」

と。ヨハネ伝を見てごらん。キリストは、

「私は住まいを備えに行ってくる。用意ができたならまた帰ってくる。そして、いつもあなた方と一緒に居りたいんだ」と、ヨハネ伝14章に出てくる。

私なんかは自分が24歳でいっぺん行き詰まって死にたいくらいになった時に、友人を通してキリストへ導かれた。それからはもうおつりの人生なんです。いっぺんは死んでいると思っている、24歳で。24歳で死んだやつが60年生きて、今83歳で、来年は84歳申年でバンザイと(笑)。猿というのは真似をするんやな。だから、私は神さまの真似をするなんて。24歳でいっぺん死んでますから、そこから60年というのは全く恵みの60年なんです、来年で。

身体は死んだ時に焼かれて灰になります。焼かれなくても、地面の中に埋められたらやはり腐っ

て土にかえります。人間の身体というのはそんなふうに、

「土から生まれたものは土にかえる」

とちゃんと創世記に書いてある。土から生まれたものは土にかえる。

「土から生まれた人間に神さまは生命の息を吹き込まれた。これで人は生きる者となつた」(創世記2:7)

と書いてある。それが霊です。霊人、霊なる人として人間は、この身体が朽ち果ててもなお存在するんです。では、霊はどこへ行くの？

行くところがないのを無縁仏とか呼んでいる。皆さん、慰霊祭というのをなさいますね。やはり、霊というのは、あきらかにこの人間の肉体的存在から離れて存在するんです。その霊がどこへ行くのか？ 自分の欲するところへ行くそうです。日頃から光を慕って、神さまの世界と馴れ親しんでいた霊は、「あつ、あそこが私の行き場所です」と。神さまが、

「おいで、おいで。もうあなたのためにちゃんといいい所が用意できているから、いらつし

やい、いらつしやい。ご馳走あげるよ」

「はい」

と言って、喜び勇んで行くんですよ、私なんかはね。もう、ど厚かましいけれども(笑)。いや、皆さんも、自分の好きなところへ行けるそうですよ。

好むのは光か闇か

だから、日頃から暗い交わりをやっている人は暗いところへ行きます。他は居心地がわるいんですね。暗いところにいた人がいきなり眩い世界へ行ったら、もうムズムズムズして逃げ出したくなるそうです。また、ものの本によると、人がこの世を去るときにいろいろな霊がやって来て、

「おいで、おいで」

と誘い込む。新人生歓迎会みたいに。新入部員の争奪あらそいです。かつて時計台の下の講堂を会場として行われていた京都大学の入学式なんかのときでも、吉田神社へとつづく参道はいろんな運動部の部員たちが、新人生を捕まえにかかろうと並んでいるんですよ、新入部員獲得のために。我々がこの世を去るときも、身体はだめになりますけれども、霊は

「さあ私はいつたいてどこへ行くんでしょうか」

とキョロキョロしていると、

「あなたはこつちだ、こつちだ」

「ああ、そつちや」

と、全部、自分の霊の姿の似たようなところへ行くそうです。だから、暗い霊がいきなり光のところへ来たら、これは全然合わない、水と油です。今度は、光の霊は

「そんな暗いところは違う、違う。こつちの光の方や」

と。そんなふういきちんと分けられていく。神さまは何もされない。「上でニコニコ笑っておられる」

とは書いてないけれども、神さまは何もなさらないんですよ。みんな自分で自分の行く道を決めているそうです。

それはヨハネ伝3章に出ています。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。光がやって来たのに、人は行いが悪いので、光より闇を選んだと書いてある。ヨハネによる福音書3章の16節から、

「<sup>16</sup>神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。<sup>17</sup>神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。<sup>18</sup>御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。<sup>19</sup>光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。<sup>20</sup>悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。<sup>21</sup>しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」(ヨハネ3:16-21)

と、ちゃんとヨハネ伝3章のところに書いてあるんです。非常に合理的です。

## 人の法と神の法

神さまの世界は法則の世界、合理的な法則の世界です。だから私は、ここにいらっしやる二人の法学の先生方に言いたい。自分たちは私も含めて一生懸命に法学の勉強してきました。けれどもこのへんで、神さまの法を——それは聖書に表れているから——こっちも同じような熱心さで勉強しようではありませんかと、さっきプロポーズしたんです。まだOKは言ってもらってないけれども(笑)。

「人の法」と「神の法」、これは相逆らわない。人の法のもうひとつ上に神の法がある。神の法と人の法がピタッと一致していたのがイエスの歩き方なんです。ただ当時の人は、人の法がモーセを通して与えられた。モーセの「ゲゼツツ」(Gesetz 法律)、律法、モーセの法律には精通しているけれども、神さまの法は届かない。イエスは神の法に従っているいろんなことをなさる。すると、「けしからん、けしからん」と言っただけで、人の法で神の法を裁いている。そのキリストの法は、向こうから来た方ですから、神の法の世界にいた方が人の法の世界までおられてきて、しかもそこへ神の法を持ち込んだから、ややこしくなった。

「敵を愛せよ」なんてとんでもない。『敵は憎め』と言われたじゃないか」

「そうだ、旧約では『敵は憎め』と言われた。しかし、私は言う、『汝の敵を愛せよ』と」

こんなふうには、「しかし、私は言う」と、全部引っくり返した。マタイ伝で。それは神さまの法を人の法の中に持ち込まれたんです。だから、人の法で飯食っていた法律学者たちは怒りだしたわけで

すよ、「こんなやつはけしからん、やつつけろ」と言っつてね。

まあ、そういう角度からこの福音書をごらんください。おもしろいですよ、楽しいですよ、これお読みになったら、本当にね。マタイ伝なんかには律法がたくさん出てきますし、それからヨハネ伝、これまたおもしろい。そういうのにもう嬉々として私はこの頃読んでいます。自分までうれしくなってくる。しかも、

「そうだ、そうだ、そうだ。そのとおりだ。これを叫ばないでおいようか」  
なんていう気になってしまふ。

### 私の身分証明書・神さまからのラブレター

私のこの聖書は、文語訳の新約聖書、それに詩篇付きなんです。なぜ、詩篇付きかというと、ルターは、

「詩篇は小さい聖書である」

と言った。旧約・新約の両方のものを全部含んでいるのが詩篇であると。これは文語訳の小型版聖書ですけども、「詩篇付き」と書いてある。私はこれを本当に愛用してまして、どこへ行くにもこれを引っさげて行くんです。

「それは何ですか」  
と聞かれると、

「これは私の身分証明書です、私のことは全部ここに書いてあります」

と。それからもうひとつ言う、

「神さまからのラブレターです」

と。これはラブレターです。

「あなたを愛する。あなたが好きよ。あなたのことを思っているよ」

という、全部そういうラブレターなんです。だから、それを本気で受けとらないと。どんなにラブレターをもらっても、みんな破って捨てていたら、それはラブレターを書いた人がかわいそうですよ。これは本当にラブレターなんです。これを何か教典だとか、キリスト教の聖典だとか、聖書学者みたいに、「この起源は何であって、これはもともと原語はアラミ語でどうであった」とか、そんなことをゴチャゴチャ言っても、何にもならん。端的に、

「あなたを愛しているよ。あなたのこと好きなんや。あなたに生きてほしいんや。あなたに生命を与えたい。生き生き生きてね。そして私はうれしいよ」

というラブレターなんです、本当に。だから、私はこれを読んでいたらいつも、

「本当にそうだ、そのとおりですよ」

と、そういう気持ちで、これはもう離せないですわ、この小型のものは。皆さんも、そのくらいに、これに馴れ親しんでください。特に私は法律の方に言いたい。六法全書なんて、あんなものを一生懸命に勉強している。私の妻のお母さんが私に言われた、

「奥田さん、法律をやってきてしんどくない？」

「なんで？」

「あんな六法全書をみな覚えてるんやろ」

「とんでもない。ぶ厚い六法全書なんても、とてもじゃないが覚えられん」

「なら、なんで勉強せんならん？ 六法全書にみんな出ているんやろ。なんで勉強せんならん？」

とまた言われる。「六法全書を覚えているか？」と言われて、「そんなもの覚えられん」と言うと、「六法全書になんでも書いてあるのに、なんで勉強せんならん？」と。

### 法律学徒として私の遺言

そのくらいに法律学というのは大変なんです。でも、あの大変な法律学を黙々と、おもしろくないものをやっていく、その忍耐力があったら、こんな聖書なんてものはわけないですよ。本当です。ぜひ、法律の方に「ローマ書」を読んでくれと言いたい。ローマ書は非常に論理的に積み重ねていきます。人間の罪とは何か。救いとは何か。イスラエル民族と異邦人の関係はどうだと。それが全部、ローマ書に書いてある。

だから、やはり法律学徒として私はいろんな先生方を思い浮かべるんです。現役の先生、先輩の先生に、読んでほしいなあ、本当に読んでほしいなあと思えます。法律学の難しいことをやって

来た人が読めば、スーッと読めるはずですよ。それを、今も教壇に立っているお二人の先生方はぜひ、

「奥田はこんなことを言っていた」

と言うてほしいんです。「あなたは？」と聞かれたら、

「私は知らん。ただ奥田がそう言っていた」

と言ったらしい。奥田が、

「今の現役の、あるいは先輩の法律の先生方にぜひ聖書に食らいついて、ものにしてほしい。

これは私の遺言だ」

と言っていたと。それくらいに、私は本当にそう思います。

日本人は、さっきのクリスマスのサンタクロースで終わっているでしょ。イルミネーションで終わっているでしょ。もったいないですよ。サンタクロースはいったい何を持ってきたか。しかし、サンタクロースの持つてこなかったものをキリストは持つてきてくれた。イルミネーションが照らしていたら、そのイルミネートは内に光がなければ、イルミネート (illuminate 照らす) できないですよ。

「内なる光が闇ならば、その暗さはいかばかりぞや」

とキリストが言われた。だから全部、キリストさまご自身があなたの方お一人一人の中に宿られて、マリアさんの中に聖霊が宿ったように、今度はあなたの方お一人一人の中にキリストの霊が宿って——この「霊止」の「霊」は神の霊、キリストの霊です——キリストの霊が止まって、そして、皆



さんが光になる。

「汝らは世の光なり。地の塩なり」

という。全部、お一人お一人が本当にキリストの分身、キリストと同質——自分からは出てこないです。全部宿ってもらって、ちょうどマリアさんの中に宿ったみたいに——今度はキリストの霊が一人びとりの中に宿って、そして小さなキリストにされる。それがイルミネートして、百人のクリスチャンが集まったら、まわりのクリスマスツリーよりも輝いている。しかも、七色の光を発しているという、これが本当のクリスチャンであり、本当のクリスマスであると思う。そういうふうにしてクリスマス教会を迎えていらっしやるか。特に御霊のキリスト、聖霊のキリスト、これが大事なんです。キリストの誕生はそこまでいかないと、本当の誕生の意味を持たない。

言い逆いを受くる徴

そのことをシメオン老人が預言しています。ルカによる福音書の2章21節から、

「<sup>21</sup>八日たつて割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

<sup>22</sup>さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。<sup>23</sup>それは主の律法に、『初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される』と書いてあるからである。<sup>24</sup>また、主の律法に

言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

これは一番貧しい人の献げ物がこれなんです。

<sup>25</sup>そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。

霊止まる霊止だったわけですね。

<sup>26</sup>そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。<sup>27</sup>シメオンが『霊』に導かれて神殿の境内に入ってきたとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。

この出会いですね。全然、携帯電話でしめし合わせているわけでも何でもない。打ち合わせもしてないんですよ。かたやシメオンはこのイエスという方に会う、それだけを望みとしてずっと晩年をすごしてきた。ところが、いつ現れるか全然わからない。けれども、ある霊が「今だよ」と言っていてと押しした。そこで、やって来ると、両親がイエスを抱いて宮参りにやって来たというわけです。

<sup>28</sup>シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

<sup>29</sup>「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。

<sup>30</sup>わたしはこの目でああなたの救いを見たからです。<sup>31</sup>これは万民のために整えてくださった救いで、<sup>32</sup>異邦人を照らす啓示の光、

我々は異邦人です。異邦人も祝福を受ける。それからみ民イスラエルにとつては、

あなたの民イスラエルの誉れです。」<sup>33</sup>父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。<sup>34</sup>シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上らせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。」<sup>35</sup>——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」(ルカ2:21~35)

この「反対を受けるしるし」というのは、文語訳では、

「<sup>34</sup>……視よ、この幼児は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆いを受くる徴のために置かる。」<sup>35</sup>——剣なんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の頭れん為なり」(ルカ2:34~35)

と。「言い逆いを受くる徴」と書いてある。反逆、言い逆い、それを受ける徴として置かれていると。マリアさんに対して実に不吉な預言をするわけです。

つまり、人間の中に潜んでいる隠された反逆の思い。これが罪なんですよ。「神さま、神さま」と言っても、神さまを神さまとして尊んでいない。

「自分に何かしてくれる神さまだったら信じてやってもいい。何もしてくれない神さまなんか信じない」

という、自分が中心で、自分の願いを叶える神さまだったら受け入れてやるという、人間主体なんです。

### 日本人の信心

だいたい、人間の信心はみなそうでしょ。日本だって、お宮参りも全部そうでしょ。百円献げたら千円ぐらい返ってくると思ってる。そうでしょ。私は京都にいますから、この辺のお宮さんは伏見稲荷大社です。それは三が日にもうの凄なお金が献金されるそうですよ。だいたい商売やっている人はみなやるそうです。それはなんでか? エビをもってタイを釣るという。それでまた翌年になると、「ああ、去年はありがとうございました。エビでタイを釣りました。今年もよろしく」なんて、言うてるかどうか知りませんが、だいたい日本人の信心というのはみんな、自分が献げ物をしたら見返りがあるという、いわば賄賂なんですよ、ハッキリ言うと。そうでしょ。

「他のやつは知りませんが、私にはいいことをやってください」

と。私はあの菅原道真公が気の毒でしょうがないんですよ。受験生がみな行くでしょ。みんな通してやりたいけど、定員数がある。定員があるのに、「われもわれも通してください」と言われたら、菅原道真はなんぼなんでも定員を増やすわけにいかんでしょ。どないなさるのかなと思ってね、学問の神さまは。

「学問の知恵をください」

と祈る。これならいい。「合格させてください」これはあかんわ。そんなことを親御さんはわかっているのかしら。あなた方は道真公を苦しめているんじゃないのと。神社は神社で喜んでいるわな、献金が入るから。日本の信心というのはみな人間中心なんです。

「お子さん欲しかったら、結婚したかったら出雲大社へ行きなさい。ちゃんと結婚できませよ」

とか。それぞれみな分業なんです、日本の神さまは。分業で成り立っている。だから、いくつものくつも行かんならん、かけもちで。正月なんか、皆さん、はしごですわな。夜明けに出かけて、あつちこつちへ行つて。そんなふうには、日本の信心というのは全部、わが身かわいいんです。わが身がかわいくて、「この身をこの一年なんとかよろしくお願いします」と言っ行って行くわけですね。

### 形ある物を一切造るな

ところが、イスラエルの神さまは全然違つたわけです。二千年前ですよ。二千年前にこんな信心があつたというのは驚きですよ。しかも、イスラエルの神さまのもうひとつの特色は、

「形ある物を造つてはいかん」

という、これは人間にとつて残酷ですよ。みんな形ある物を造つてしまふわけです。そうですよ。どこへ行つたつてみなあるでしょ。それをみんな撫でたりなんかして。たとえば、牛を撫でたら何かなると思つて、そこがピカピカ光つてますわ、みんなが撫でるから。それくらいやはり形ある物

にすがりたいんです、人間は。だから、大仏さんなんてでつかいものを造るでしょ。「入魂」ということをやる。魂を吹き込んだら、そこで変わるんですつてね、仏さまに。そういう、何か形ある物を通して信心を求めていくというのがだいたい人間の常の心なんですけれども。神さまは、

「神の像として」形ある物を一切造るな

と言う。しかも、古代ですよ。古代というものはすべて形ある物でものごとを表す。法律の世界でいうと、土地の所有権を譲渡するときには、土地の所有を表すシンボルである剣だとか、何か力の象徴のものを引き渡すことによつて、「これで支配は移りました」という、そういう形でやるんです。

だから、信仰だつて、ただ「信じます」ではあかん。バプテスマという、水の中にザブンと浸されて起き上がつて、これで「はい、大丈夫」という。今は、バプテスマというのは相当、信仰が進んで聖書がよくわかつて、「さあ、洗礼をお授けしましょう」というタイムラグ(時間的なズレ)があるんです。昔は違う。「信ずる」ということは、ザブンと水に浸されることが「信ずる」ということだった。形で表わさないとだめだつたんです、昔はね。

例えば、パウロとシラスが牢に入れられてその夜祈っていたら、大地震が起こつて、囚人たちの鎖がみな解けた。全部逃走したと思つて、看守たちが腹を切ろうとしたら、誰も逃げてない。それで看守たちは驚いて、

「これは申し訳ない。どうしたら救われますか」と言つたら、

「イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」  
とパウロが言うわけです。そしたら、その獄卒はパウロたちを自分の家に引きとって、打ち傷を洗ってご馳走して、そして、その晩に信者になった。その晩にもうバプテスマを受けている。だから本来、バプテスマというのは、信仰という見えないものを見る形で表している。それだけのことなんです。

ところが、今は、見えないものは見えないとしてそのまま受け入れるのが我々でしょ。法律の世界でも、所有権はなにも形をもつて移さんでも動きますよというのが日本民法なんです。「意思表示のみによりて移転す」と書いてある。それを「第三者に、移ったというのを言うために登記をしておきなさい」と、そう言っているだけなんです。だから、信心という本来、見えないものを人々の前に見える形で表すためにバプテスマというものがあつた。そういう形にこだわることは本来なものでもない。本質的にはない。

私があなただを選んで捕まえた

むしろ、自分自身をイエス・キリストの中へ投げ入れることが大事です。

「主さま、あなたと一つにしてください」  
イエスは、

「あなたが言う前に、私はあなたをつかまえたよ」

と。これなんです。ヨハネ伝をご覧ください。

「あなた方が私を選んだのではない。私があなただ方を選んで捕まえた」

と書いてある。弟子たちはみな自分で——まあ、私なんかも含めて——「自分がイエスを信じた」と思っている。向こうは、

「違う。私があなただを信じさせてやったんだ。私がお先だ。あなたは気づいただけだ。あなたが気づく前から私はあなたのことをずっと知っていたよ」

と。パウロがそうです。パウロはキリスト教徒を迫害していた。添書そえふみをもらって、ダマスコにいるキリストの信者たちをやっつけて捕まえて処罰するために、彼は殺害の息をはずませてダマスコへ急いで行った。その時に、天から光が現れて、パウロはぶっ倒された。

「あなたはどなたですか!？」

「汝が迫害するイエスである!」

と。それで彼は目が見えず、ものが言えず、暗黒の三日間を過ごす。そして、アナニアというキリストの弟子に示しがあつて、

「今、サウロ(パウロの前の名)という青年が祈っているから、あいつの所へ行って手をお押しして祈ってやってほしい」

「いえ、いえ。あいつは恐ろしいやつで、そんなのはとてもじゃない。私なんか行く場合ではありません」

「違う、違う。彼は今、祈っている。行って、祈ってやれ」  
 と。それで、アナニヤは行って、

「兄弟サウロよ、汝にダマスコ途上で現れたイエスという方が、『サウロの所へ行って祈ってやれ』と仰ったから手を按いて祈る」

と。祈ったら、

「目から鱗の如きもの落ちたり」

と。サウロは生まれ変わったですよ。そして、

「イエス・キリストは救い主なり」

と言いだしたから、今度は仲間から、

「この裏切り者め、こんなやつは生かしておけん」

と、迫害を受ける。そういう凄いドラマがありますよね。我々は「自分で信じた、自分の自由意志で信じた」なんて、主観的に思ってますけれども、実はそうではない。

神さまのシナリオどおりに

パウロ自身もガラテヤ書一章で、

「母の胎内にいるときから私を選んでくださった」

と言ってます。いや、このガラテヤ書も、皆さん本当に読んでください。感動しますよ。書き出し

が凄いです。

「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えら

せ給いし父なる神に由りて使徒となれるパウロ」(ガラテヤ一)

つまり、使わされた徒ということ。ここに、皆さんも「パウロ」の代わりにご自分の名前を入れたらいい。

「人よりに非ず、人に由るにも非ず、イエス・キリスト及び之を死人の中より甦えらせ給いし父なる神に由りて使徒となれる○○○○」

と。それでちゃんと通用する。我々はみんなそうですよ。それから15節に、

「<sup>15</sup>されど母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもて召し給える者、<sup>16</sup>御子を

我が内に顕して其の福音を異邦人に宣伝えしむるを可しとし給える時」(ガラテヤ一・

15)

とある。パウロが伝道に立ち上がったのは、ダマスコでキリストにぶつ倒されて目が醒めてからですけれども、実は

「母の胎を出でしより」

と書いてある。いや、もつといえは、「母の胎にありしときより」です。母の胎にありしときより、もうちゃんと神さまの方では予定しておられたと。

これは予定説みたいになるかもしれませんが。全部、神さまの計画の中に我々はめ込まれている

んです。神さまのシナリオどおりに動いていつている。だから、人間なんてね、自分でこうしたあ  
あしたと「人生のわが道」なんていつて自叙伝を書くかもしれないけれども、本当は、生まれ出  
る前よりちゃんと神さまが予定しておられて、そして時が満ちてこうなったという、なんかまるで  
運命論みたいになるかもしれない。カルヴィン(ジャン・カルヴァン(Jean Calvin, 1509~1564)フ  
ランス出身の神学者。ルターやツヴィングリと並び評されるキリスト教改革初期の指導者)の予定説みたい  
になるかもしれない。でも、結局そうなんです。全部、神さまのご経綸(けいりん)のご計画が一人ひとりを通  
して成っていく。一人としてそこから外れ(はず)ないんです、どんな生まれ方をしようとして。

人間的には不幸な、心ならずして身ごもってしまうとか、いろんなことがあるでしょう。そこか  
ら生まれてくる、あるいは不義なる子と言われるかもしれない。でも、そういうもの全部を包んで、  
全部を救いの中に入れてしまうという神のご計画がある。その中で、ある時、御子を示されて、

「ああそうだ。自分の人生は今までマイナスばかりだと思っていた。変な星のもとに生  
まれて、不幸の寄り集まったデパートみたいな存在だった。不運な子だったのが、いや実は、  
神さまはそういうどん底に自分を突き落とすとして、ある時バツと目覚めさせて、そして、『実  
はあなたを本当に私の子どもとして育てるために今までいろんな苦労させたけど、もうい  
いよ。今から光だよ』と言ってくたさる」

と。一人ひとりに対してそうやって恵みが来ているんです。

### 因果法則を全部断ち切って

それが、別の言い方をすれば、律法の世界——律法という因果応報の世界——これはモーセを通  
してやって来た。けれども、恩恵と真理はイエス・キリストを通してやって来た。もう今までの因  
果応報は通用しない。そういうった因果の法則なんか全部断ち切って、本当に恵みそのもの、生命そ  
のものの中に抱きとってくださる。

そしたら、因果の法則はどうなつたんですか。キリストが全部、十字架で背負った。キリストは  
全部、十字架で背負ったんです、マイナス要因は。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と言って叫ばれた。棄てられたんです、我々の呪いを全部背負いこんで。それが十字架だった。

ですから、人間的な相対的な、幸せとか不幸せとか、「私はついてない人間や」とか、「私は呪い  
の中に鎖されている」とか、人間的にはいろんな言いたいことがあるでしょう。そういうったものを  
突き抜けた世界から、永遠の神さまの世界から光が射し込んできて——その光はキリストです——  
その方が捕まえてくださって、

「今まではあなたは闇だったかもしれない。今からは光だよ。今からは生命だよ。今までは  
マイナスだったかもしれない。今からはプラスだよ。」

と、全部引っくり返してください。この大革命。「革命」とは命が革(あらた)まると書きます。我々は因果法  
則の中で生きてきた。善いことをやった人は善い結果があるだろう、悪いことをやった人は悪い結

果が伴うだろうと。刑法なんてそうです。こういうことをやったら処罰がある。そのとおりになったから処罰だと。そういう因果応報という、そういう世界に我々は住んでいた。ところが、それを突き破って、本当の神さまの愛の法則の中に包みこんで生命をくださる。プラスばかりをくださる。では、マイナスはどこへ行ったの。キリストが全部引き受けた。これが十字架なんです。それをシメオンが預言しているわけです。

「マリアさん、あなたの心を剣が貫きますよ。喜んでいる場合ではないですよ」と。そして、

「マリアはじつとそのことを思いめぐらしていた」と書いてある。

裁きは私に、愛はひとに

今日はいろんなことを申し上げました。でも、私が言いたかったことは、世の中はサンタクロースだ、クリスマスだ、イルミネーションだといって、華やかなものが尊ばれておりますけれども、実は神さまの世界ではとんでもない。神さまご自身の苦しみがあり、それをキリストが引き受けられ、そして、神さまが人を愛していらつしやる。

でも、罪なるものはストレートに神の世界に入れないんです。不義なる人間は不義なるままでは入れない。不義に対しては処罰というか、義の貫きがある。それは裁きなんです。裁きの奥に愛が

隠れているけれども、その愛に届かないで、裁きで人間は滅びてしまう。

その裁きの面をキリストが引きとった。そしたら、裁きの奥に隠された、義の奥に隠された愛が顕れて来たんですよ。神さまの義というのは、裁きながら救い上げるといふ——下って行って裁いて、その奥の愛にまで届きたかったのに——この裁きで人間はみな吹っ飛んでだめになってしまう。愛が顕れない。それをキリストが、

「裁きは私がいただきます。あなたの本当の御意みこころである愛を顕してください」

と。だから、イエスさまは我々を救ってくれただけでなく、神さまをも救われたんです。

神さまは苦しんでおられた。人を本当に生かしたい。けれども、義というものは、どうしたって、裁きとなって顕れざるを得ないわけです。何でも、「ああいいよ、みんな、いいよ、いいよ」なんて、そんなことはできないわけです。義は貫かれる。しかし、貫いたら、人間は吹っ飛んでしまう。神さま自身が苦しんでおられた。それをキリストは引きとった。そして、愛がストレートに顕れてきた。だから、私は、イエスという方はなんと親孝行な方かと思う。本当に、

「父よ、父よ」

と言っておられたけど、実はイエスは父なる神ご自身を救いあげた。それがローマ書の3章に出てきている。

「神はおのれの義を顕して、自ら義たらん為、またイエスを信ずる者を義とし給わん  
為なり」(ロマ3・26)

とあります。そういうふうを考えますと、非常にローマ書も深いし、実に神さまの世界の法則というの深いんですよ。それを法学徒のお二人には、そこまで貫いて読みとっていただきたい。やはり、私は法学をやってきてよかったと思う。法にはちゃんとした論理があります。法の論理。その論理を超えたところまで突き抜けなければいけない。それを突き抜けていくと、神さまの法と接点を結びることになると思います。

ですから、人の法を勉強してきた我々はそれを今度は更に、神さまの法を勉強して、

「それは人を活かすものだった、人を活かすのが神さまの法だった」

と。人間の法はそこまでいかない。これは「ギブ・アンド・テイク」の世界ですから。人の法は「ギブ・アンド・テイク」です。「何でも持っつけ、持っつけ」と言ったら、成り立たないんです。不法行為があっても「ああ、いいよ、いいよ」と。人を殴っても「ああ、いいよ、いいよ」と、そんなことやったらだめなんですね。やはり、

「無理やりに取ったやつは返しなさい。殴ったやつは賠償しなさい」

と、これが人の法なんですけれども。

小さなキリストにされる

神さまの法では、マイナスは全部キリストが引きとった。そして、生命だけをくださった。その世界へ突き抜ける。突き抜けた人間は今度は、キリストの似姿にすがたになるはずです。キリストを受けと

った者がキリストの似姿に変わらなかつたら偽りです。本当にキリストにぶつかつたら、キリストにされてしまう。小さいキリストになるんです、一人ひとりが。一人ひとりが小さなキリストになれる。それは自分が空っぽだから。自分は空っぽなんです。「いや、私なんかゴチャゴチャしてます」なんて。

「そのゴチャゴチャは全部、十字架が片付けた。十字架がきれいに掃除してくれた。そして、

神さまの霊が、キリストの霊が宿った。この霊は生命なんだ」

と。ヨハネの福音書に、

「わが言は靈なり生命なり。人を活かすものは靈であつて肉ではない」

とある。つまり、生まれながらの人間では、人は生きられない。もうひとつ上から別の生命が宿らないといけない。それが、

「人、新たに生まれずば」

とキリストが仰ったこと。本当に、ヨハネ伝は楽しいですよ、深いですよ。「そうだ、そうだ」という気になってきますよ。だから、私は

「聖書は自分の身分証明書だ」

と言う。それから、

「聖書は神さまからのラブレターだ」

と。ヨハネ伝の中の一つ一つの言葉がの中で躍動する感じがするんです。だからぜひ、そこまで



読み込んで、そして言葉と一つになってほしい。言葉と一つになる。

「言は肉体となりて、われらのうちに宿れり」

と、ヨハネ伝の始めに書いてある。今度は、このキリストという永遠のロゴス、御言、生命が一人ひとりの中に宿って、そして成長していつて、そして、

「私を見たものはキリストを見たのだよ」

と、みんな告白できるんです。そうでしょ、キリストが乗り移っておられるんですから。キリストが乗り移っている。

「旧い我は十字架で全部片付きました。十字架で無くなっています。私は新しく生まれ変わりました。キリストさまです」

「ヘー、あんたがね」

「そうや、『あんたがね』とびつくりするような人間がキリストのものにされるとい、これは凄いでしょ、奇跡でしょ。神さまは奇跡の神さまだから」

と。そうなんです。人間しかできないことをやっているのが神さまではない。人間ができないことをやるのが神さまなんです。その方が、

「あなたは生きろ。あなたは死んだらだめだよ。この肉体は滅びるよ。でも、滅びないものがあなたの中に宿った。これがうれいんだよ」

と。これがクリスマスです。そういうところまでしつかり受けとって、人たちに對して、

「どうや、わたし変わったと思わへん？ 今まで恐い顔してたのに、ニコニコしてへん？」

なんて言って。いや本当に、うちなるものが光りだしたら、うちが安らかになれば、表情も安らかになる。絶対そうですよ。だから、まわりの人が言う。「あんた、変わったね」、「そうでしょ」、「どんなお化粧？」、「キリスト水というお化粧したから」なんて。キリスト水でお化粧すればきれいになる。キリストの真清水を飲めば、内側が爽やかになる。キリストは素晴らしい。これが神さまのプレゼントです。それがクリスマスなんですよと。

## 祈り

そういうことで、時間がきました。それでは一言お祈りして終ることにいたします。

主イエス・キリストさま。こうして多くの兄弟姉妹の方々、また初めてお会いする方々と共に、あなたの天からの祝福の御言を存分に味わうことができました。

我々の中からは何も出てきませんけれども、あなたは無限無量なる生命、永遠なるものを私たちのもとへ携えてくださってくださいました。本当に、主さま、クリスマスとはあなたの一方的な恵みを受けるとき。私たち光なき人間、暗闇の中に閉ざされてあえいでいた人間の中に、あなたは光となり生命となって宿ってくださいました。イスラエルも異邦人もありません。ちょうど地球が一つの太陽によって照らされ生かされているように、あなたという霊界の永遠の生命なる太陽でいらっしやるあなたが、お一人お一人の中に生命となって宿り、

「生きるんだよ、生きるんだよ、愛の生命に生きるんだよ」  
と。そう言って、一人ひとりを常に生命づけてくださることを感謝いたします。

どうぞ、今日ここでお聴きになった方々がもう一度、ご自分の目でこの聖書を、あなたからのラブレターを、しっかりと受けとって、日々力をいただき、喜びをいただき、そして前に向かって進んで行き、また、苦しんでいる人や悲しんでいる人に、この光、生命、愛、慰めをお分かちすることができまますように、一人ひとりをお用いください。

感謝して、この祈りを聖名によって御前にお献げいたします。アーメン。